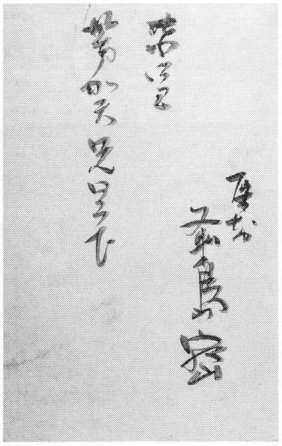
沼津市
明治史料館通信

1991.10.25（季刊 年4回発行）Vol.7 No.3　通巻第27号

▶芳賀可伝（芳賀久雄氏所蔵）
明治9年5月28日　21歳6ヶ月



▲前島密が芳賀に贈った自分の写真とその裏書▶
（芳賀久雄氏 所蔵）

シリーズ
沼津兵学校とその人材 ㉖

郵便制度草創期の功労者
芳賀可伝

その肖像が一円切手にもなっている旧幕臣前島密（一八三五～一九一九）は、わが国近代郵便制度の創設者として知られる。前島を助け、特に外国郵便の分野で創業期に少なからぬ功績をあげた人物に、芳賀可伝（はがかでん）という人がいた。彼は若くして病没したため、後世に名前を残すことはなかったが、前島にとっては忘れ難い愛弟子・部下であり、「此芳賀可伝といふ人は、私が以前開成所と自宅とで英学数学を教へた人で、後に米人に就て英語が善く出来、また仏蘭西語も出来て、文辞の才もあり、性質温良で勉強な人でした。外国郵便に従事する様になってから大に其事務に通暁して、或場合は本局の万国郵便課長であった米人ブライアン氏も一歩を譲る位でしたが、惜しい事に天其年を仮さずして、虎列拉に罹ツて、大に其技倆を伸ばさない内に、若死をしたのは残念な事でした。」（『前島密遺稿集・郵便創業談』一九三六年）とまで師に言わしめた才能の持ち主だ

ったのである。彼はまた、沼津兵学校が生んだ人材であった。

芳賀可伝は、安政元年（一八五四）十二月四日、幕臣芳賀厚太郎可修の子として江戸に生まれた。通称は鐵一郎。幼くして父を失い、母に育てられたが、芹沢随軒に学問を学び、神童とまで称された秀才だった。長じて開成所に入り、英仏語や数学を学び、また前島密の自宅にも通学した。

明治維新後、師前島は遠州に移住し、静岡藩の中泉奉行などをつとめたが、芳賀は母とともに沼津に移り、沼津兵学校第一期資業生となった。芳賀を含め一期生五名は、旧幕時代から開成所で学んでいた者たちであり、開成所連と呼ばれ他の生徒たちから区別された。

明治四年（一八七一）、廃藩とそれに続く兵学校の兵部省移管という状況下、沼津から静岡に赴き、アメリカ人教師クラークの静岡学問所での教育を手伝い、教授と訳官を兼ねた。

その後上京し、明治七年（一八七四）には内務省駅逓寮十等出仕となり、のち駅逓局一等属になった。その間、横浜や大阪で郵便事業の創設に尽くし、特にその語学力を生かして外国郵便を専門に担当し、横浜郵便局内では局員の英語教師でもあった。また、八年に万国連合郵便会議がベルンで開かれたことを報ずるフランスの新聞を彼が翻訳したことがきっかけで、十年（一八七七）に日本は万国郵便連合に加入することになったというエピソードも残した。

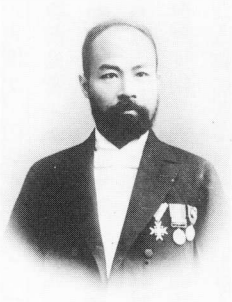
しかし、十二年（一八七九）八月二十二日、コレラのため亡くなった。二十五歳だった。現在も谷中天王寺に残る彼の墓碑銘は、篆額が前島密、撰文が中村正直によるものである。

可伝の妻千代子は、幕臣成沢良作の娘であり、従って可伝は、沼津兵学校教授渡部温や第二期資業生成沢知行とは義兄弟の間柄であった（『沼津市明治史料館通信』第23号参照）。彼には子がなかったため、千代子未亡人は新家勇太郎という人物と再婚し芳賀家を継がせた。勇太郎は芳賀勝貞と改名した。その勝貞も実は沼津兵学校の出身者であり、第三期資業生だった（なお、慶応四年時点で撤兵差図役勤方だった芳賀行蔵という人物がおり、彼を勝貞とする文献もあるが、新家勇太郎の勝貞とは別人と思われる）。勝貞は嘉永五年（一八五二）の生まれ、明治二十七年（一八九四）に没した。最初文部省に出仕したが、十二年から駅逓局に転じ、外国文書課事務取扱、函館郵便局長、東京逓信管理局郵便電信課長などを歴任し、見事に可伝の衣鉢を受け継いだ。

ところで、明治初年、民部・大蔵・内務・農商務省などに属した駅逓司・駅逓寮・駅逓局時代から逓信省となるまで、郵便制度の基礎づくりに関わった官僚の中には、沼津兵学校や静岡藩ゆかりの旧幕臣が少なくなかった。前島密や杉浦譲（初代駅逓正）は著名である。芳賀可伝・勝貞については既に紹介した。

芳賀可伝の墓碑銘拓本
（芳賀久雄氏所蔵）

芳賀勝貞
（芳賀久雄氏所蔵）



山木利渉
（渡瀬雅子氏所蔵）

たとえば、前島密が内務大丞兼駅逓頭の地位にあった明治八年時点の駅逓寮の官吏は、前島以下一三一名だが、その内四四名が静岡県・浜松県の出身者だった。両県の出身者は、ほぼ旧静岡藩士族（旧幕臣）と看做してよいであろう。すなわち、大属根立栄は元沼津郡方、権大属鈴木知言は元沼津兵学校第三期資業生、十四等出仕宍戸鎰は元万野原学校所素読教授方といった具合である。

前島が駅逓総官の任にあった明治十四年（一八八一）では、駅逓局の官吏は前島以下二五一名、内四七名が静岡県の出身であった。沼津兵学校の出身者では、杉浦岩次郎（第七期資業生）が九等属、山木利渉（附属小生徒）が十等属、関巳吉（第四期資業生）が十等属になっていた。杉浦は高知、山木は台南の郵便局長になった。

〈参考〉谷口正明「芳賀可伝と万国郵便連合」「芳賀可伝―万国郵便連合加入の蔭に―」「S・ブライアン・芳賀可伝・青山光子」『逓信協会雑誌』一九六六―1・10、一九七一―3ほか。

江原素六とその周辺〈15〉

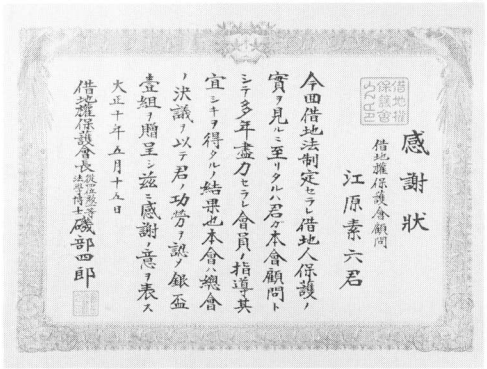
借地借家法と江原素六

この九月三十日、借地借家法の改正案が国会において成立した。地価高騰の時代、土地の有効利用が求められているが、貸主の権利を強化して土地・建物を貸しやすくするというのが狙いの今回の改正は、まさに今日の時代的状況を反映しているといえよう。

そもそも、大正十年（一九二一）に成立した借地法・借家法は、零細な借地人・借家人が多かった当時において、その権利を保護するために制定された社会政策的見地からする立法であった。

借地法の制定は、地主の権利が強すぎた明治三十一年（一八九八）の民法施行以来の懸案として、長年にわたりその立法運動が続けられたといういきさつがあったが、大地主や貴族院の反対でなかなか実現しなかったのである。その制定に尽力した人物には、弁護士で貴族院議員（政友会）の磯部四郎、同じく弁護士で衆議院議員（民政党）の横山勝太郎、やはり弁護士で衆議院議員（民政党）の高木益太郎らがいた。

江原素六は、磯部らが組織し借地法の立法化に取り組んできた借地権保護会という団体の顧問を委嘱されていたらしく、同法施行日の五月十五日付で感謝状と銀盃を授与された。



借地権保護会からの感謝状
（江原素六文書　B－32）

しかし、江原がいつから同会に関与しだしたのか、具体的にどのような活動を行ったのかについてはよくわからない。借地法・借家法が成立した第四十四回帝国議会では、貴族院の少年法案及矯正院法案特別委員会に属しており、その論議には特に加わっていなかった。

とはいうものの、江原は東京選出の代議士として、あるいはクリスチャンとして、都市問題や社会問題には以前から関心を寄せていたところがあり、借地法についてもそのような立場から何らかの関わりをもったのではないかと考えられる。

一方、借家法のほうは一層社会政策的色彩が濃いものだったが、大正十年以降、東京・大阪などでは借家人が結束する動きが強まり、昭和初期にかけ無産政党などと結び付いた借家人運動が展開した。静岡県下でも大正十年に浜松でそのような動きが始まり、同十三年（一九二四）には沼津でも借家人連盟が組織され、やがて労農党系の借家人同盟沼津市支部なども生まれた（『静岡県史　資料編19』）。もっとも以上は江原とは関係ない。

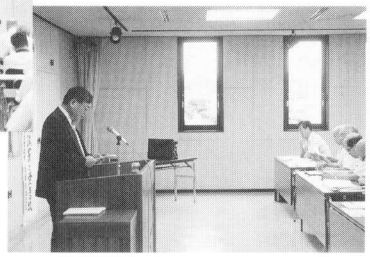
お知らせ欄

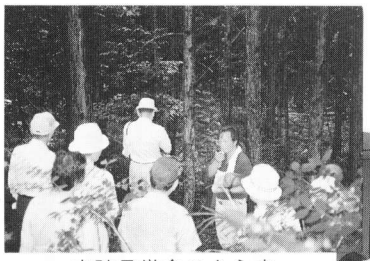
◎企画展「愛鷹牧」好評のうちに終了

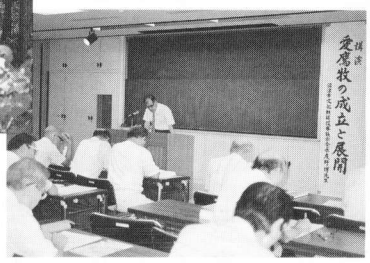
7月20日から開催していました企画展「愛鷹牧」は、9月29日で終了しました。期間中には多くの個人・団体の観覧者が来館したほか、講座と史跡見学会にも熱心な参加者が集まりました。8月20日に予定されていた史跡見学会は、雨天のため31日に延期して行われましたが、講座で聞いたことを現地で自分の目で確かめることができ、喜んで下さった参加者が少なくありませんでした。

展示を見逃した方には、本テーマについてコンパクトにまとめた企画展解説書『愛鷹牧』（50頁、カラー8頁、一一〇〇円）がありますので、どうぞお求めいただければ幸いです。

原秀三郎氏の講演


大谷貞夫氏の講演


史跡見学会のようす



友野博氏の講演

◎受贈刊行物の御紹介

静岡県内忠魂碑等（慰霊施設）全集（静岡県護国神社）、裾野市史研究第3号（裾野市史編さん室）、葛山の民俗（同上）、駿遠へ移住した徳川家臣団（前田匡一郎）、豊岡村所在文書目録第2集・第4集（豊岡村役場）、ロシア軍艦ディアナ号の遭難（和田嘉夫）、駿河第46号（駿河郷土史研究会）、沼津史談第42号（沼津史談会）、金谷町所在文書目録第1集～第3集（金谷町役場）、幾山河第四号（沼津牧水会）、ふるさと静岡県文化財写真集1建造物編（静岡県教育委員会）、富士竹類植物園報告第35号（富士竹類植物園）、裾野市史第六巻資料編深良用水（裾野市）、水と生活（三島市郷土館）、静岡県東部の偉人に学ぶふるさとまちづくり（静岡県東部振興センター）、静岡の文化第26号（静岡県文化財団）、静岡市立登呂博物館館報1（同館）、高林家史料一（浜松市立中央図書館）、伊豆沿海真景考（大島隆）、小山町の歴史第5号（小山町役場）、駿河国蒲原城址発掘調査報告書（蒲原町教育委員会）、静岡県史資料編15近世七・19近現代四・25民俗三（静岡県）、伊豆の郷土研究第16集（田方地区文化財保護審議委員連絡協議会）、菊川町郷土史料目録第11集（同町史編さん委員会）、藤枝の文学（藤枝市郷土博物館）、静岡別院創立誌（真宗大谷派静岡別院）、地方史静岡第19号（地方史静岡刊行会）、静岡県史研究第7号（静岡県）、富士市立博物館年報第5号（同館）、富士市の製紙業（同上）、静岡県立中央図書館蔵書目録第7巻（同館）、沼津市消防の沿革（沼津市消防本部）、富士市史資料目録第2輯岩松地区文書（富士市）、二十四考図絵馬（浜北市教育委員会）、菊川町史近現代通史編（菊川町）。

以上、最近受贈した静岡県内関係の主なものです（寄贈者・敬称略）。

沼津市明治史料館通信　第27号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372－1
☎〇五五九(23)三三三五